相 馬 通 信

「 相馬絵画研究所 (※1) 創立５５周年」

相馬絵画研究所創立５５周年を記念して、ＮＰＯ法人ふれあいサポート館アトリエ（理事長 倉本信之）と記念出版編纂委員会は、**「相馬名勝３０景 倉本信之 手彩色木版画集」**と文集**「命の逆算」**を出版した。

「 相馬名勝３０景 倉本信之 (※2) 手彩色木版画集 」

巻頭に、文学博士 岩崎敏夫 (※3) 氏のことばが載っている。

脚光を浴びてよみがえる
相馬の名勝三十景

相馬市には、古来松川十二景・北山八景（城北八景）・城南十景と相馬三十景が知られている。ことに松川浦は万葉集に詠まれて以来の名勝で、江戸時代からは朝廷の公卿十二人の優れた和歌と絵画が残されている。

先に十二景の和歌の碑がそれぞれの場所に建てられたが、このたび棟方志功に師事したことのある倉本信之氏の版画が完成し、浦の輝きを一層増した事は嬉しい限りである。

これで前作の城南十景・北山八景と合わせ、すべて版画として完成した。これからも相馬三十景は地域共有の文化財として大切に語り伝えていきたいものである。

←Ａ４版　92 ページ

「 命　の　逆　算 (※4)」

巻頭言　相馬絵画研究所創立５５周年を祝して

↓　Ｂ５版 231 ページ

渡辺雄彦 (※5)　宮城教育大学名誉教授、洋画家、当法人理事

困難な時期でのスタート

コロナ禍で国の外出自粛要請があった頃のテレビ番組で、自粛期間中の子どもの多い大家族の生活ぶりを紹介していた。学校が休みで毎日外出もできずに家でゴロゴロしている子どもたち、ストレスがたまるのは子どもたちだけでなく親たちも同じで、大変だと思いきや、……略……これまでにない大変さがあった様子を話す母親たちがけっこう明るかったのが意外であった。

そして「家族バラバラにとっていた食事が一緒にとれるようになって家族の絆が増したように思う」とか「きょうだいで勉強を教え合うようになって仲が良くなっ

た」とか「一人ひとりが自分の毎日の過ごし方を考えるようになり、独立心が芽生えたように思う」等々。こんな時は大家族の方が楽かも知れないという或る母親の言葉には、実感がこもっていた。

このテレビを観ていて、自分の少年期とダブって見えるところが多かった。

私も９人きょうだいの次男として生まれ、多い時で 11 人家族の時があった。時は戦争中で、どこの家もそうであったように貧しく、特に食糧難で食べ盛りの子どもを育てる親たちは大変だったろうと思う。子どもたちも、家族の一員としての役割があり、また自分のことは自分でやるようにしつけられた。年令に応じて草刈りや藁を切って馬の飼い葉づくり、外庭の掃き掃除、家の中の雑巾がけ等が毎日の仕事であったし農繁期はそれ以外の手伝いもあった。学校に持っていく弁当は自分でつくった。

この様な生活の中で責任感や我慢強さ、協力することの大切さ、独立心、達成感など育てられた気もするし、生きていくためのいろいろな知恵なども身についたようにも思う。

この様な大家族の良さや大切さに気付き、それを望んだとしても、核家族や少子高齢化が進んでる現状では、個人や一家族の力だけではどうにもならない。

そんな時期に創立されたのが相馬絵画研究所であった。しかもその内容はただの「お絵かき教室」のような習い事ではなく子どもたちが持っている底力を見出して、それを育てるというものであった。その中には当然大家族と同様にグループでないと育てにくい面が多く含まれており、家庭や地域のニーズに沿うものであったことは言うまでもない。その後も様々な体験活動と研究が進められ、さらに福祉活動への取り組みまで広め、まさに幼少年から高齢者までのオアシス作りとして定着させたのである。その先見の明には脱帽である。

この記念本はこの様なこれまでの歴史を伝える貴重な記録であり、敬意と祝意をもって多くの方々にお伝えしたいと切に思う。

（※１）1966 年、倉本信之氏が、相馬市に「見て・聞いて・触れて・遊んで 情操豊かな子へ」をテーマとして創設。

絵画教室だけでなく「創造性を培う自然体験」のため、キャンプや登山、スキー、田植えや稲刈り、日本の伝統食文化を伝える糀・味噌作りの実践活動、さらに中国北京・モンゴル・インドネシアなど諸外国とも訪問・招待による交流事業なども行う。

2003 年、「ＮＰＯ法人ふれあいサポート館アトリエ」設立。

幼児から青少年高齢者までの活動を展開。参加者は延べにして 26326 名にのぼる。

（※２）高普 11 回　昭和 34（1959）年卒　飯豊出身　武蔵野美術大学卒業

（※３）中 25 回　昭和２（1927）年卒　中村出身

（※４）「人それぞれ、残り少なくなった寿命、歩み出したばかりでまだ少ししか消費されていない命。その多かれ少なかれ残された命を逆算して、これから何ができるのか、次世代に何を残せるのかを考えたい……。」

（記念出版編纂委員会委員　倉本まり子　プロローグより抜粋）

第２章には、「55 人の命の逆算」の寄稿あり。

（※５）高普４回　昭和 27（1952）年卒　飯豊出身

（文責&選択転記　村山）